

## ストア派の哲学とプロティノス

樋笠 勝士

ポルフュリオスは言う。「また書くこと（文章）において彼（プロティノス）は、簡潔で含蓄に富み、手短でことば数よりも思想の豊富な人であった。たいていは靈感を受けた状態で情熱的に述べ、伝統に従うよりも自分の感じたままを説いた。しかし、彼の著作の中には、ストア派の教説もペリパトス派のそれも目立たぬ形で混入している。またアリストテレスの著書『形而上学』もその中に圧縮されているのである。<sup>①</sup>

師に対するこの評価には対照的な内容がある。文章の前半では、執筆行為に反映するプロティノスの思索行為が豊かな知性的思索と靈感とをもつものとすることによって、彼の主知主義的側面と神秘主義的側面の両義性が強調されている。これに対応するかのように、彼の言語においても、「簡潔な」や「手短な」の表現において、彼の言語使用の直裁性や獨一性を特徴づけていると見なせると共に、「伝統に従うよりも自分の感じたまま」の表現にもまた、哲学史の影響にさらされることなく、自己に沈潜した思索を実践していた状況を見いだせる。これらについて、我々は、ポルフュリオスが師をして仰ぎ見る眼差しをもつ

ていたとみることが幾らか可能であろう。しかし、後半は、全く異なる。前史的思想の「目立たない混入」を指摘するポルフュリオスは、そこに何を見ていたのであろうか。或いは前史的思想の直接的な影響を見いだした、或いはもっと踏み込んで、思想同士の融合を見ていたのかもしれない。しかし、いずれにしても明らかに言えることは、ポルフュリオスが極めて冷静にプロティノスの思索とその文章表現を読み解いているように思われる点である。このことは、当時から既に思想同士の区別と影響関係を客観的に問題にする学的状況があつたということを意味している。さて、思想史的影響を問題にする学的状況の中で、プロティノスの思想の中にストア派の哲学の内実が含まれているという見方が当時からあつたことは興味深い事実である。なぜなら、哲学史的に言えば、プロティノスとストア派の思想は、通常は敵対的な関係をもつていると見なされるからである。例えば、プロティノスはストア派の唯物思想を徹底的に批判している。プロティノスは「魂の不死について (Enn., IV, 7(6ff.))」において、「もし魂が物体であれば」の問い合わせの設定において、多くの論点を提示することで、いかに説明不能状態に陥るかについて論じて

いるが、そこにおいて、彼は敵対的な思想の特徴として、「氣息」

「知的な火」「狀態」といったストア派固有の理論的概念を挙げて論駁する。これら唯物思想を支える諸概念を示しつつ、プロティノスは、「もし魂が物体であれば、感覺の働きも知性の働きも、また知識の獲得もないことになるし、それに徳や美しく立派なことも何一つとしてないことになる」と言つて、ストア派の思想を断罪する。プロティノスは明らかに反ストア派的な立場を保つのであるが、その同じ彼が「書く」ときに、弟子筋から「目立たぬ形で」と見なされるほどの仕方で、どのようにしてストア派の思想を「混入」させることができたのであろうか。

おそらくプロティノスにおいては、自身の靈感的な思索が帶びる或る種の総合性の故に思想の調和的融合があつたのではないかと想像される。他方で、ポルフュリオスのような学徒の立場からすれば、プロティノスの思想やその表現の中に、手段的にせよ、ストア派の概念装置と類似する論述が implicit な仕方で主張されているのを見いだす、といった客観的比較研究の場面があつたのであろう。

既にみたように、ストア派の主張する「魂と物体を同一視する思想」・「唯物思想」に対しては、プロティノスも explicit に身を構え表現する立場をとる。しかし、惡の問題を考えるときはどうであろうか、一方では、彼は、世界の善性を、魂に、更に知性に、そして善一者に根拠をおいて、善の欠如としての惡を素材に見いだす形而上学的な立場をとりつつも (*Enn., I, 8*)、他方では、惡を実体的に捉えるゲノーシスの思想を前にするときには、現実的な立場に立ち、ストア派と共同歩調をとるかの如く親スト

ア派的な主張を展開してゆくのである。

彼は個々の惡の現実をストア派と同じように絵画作品上的一部の色彩にたどえる。「画家はそれぞれの場所にふさわしい色を与えたのである」<sup>(4)</sup>。現実世界に出現する諸惡は、叡智的な多様性の故であり、世界を構成する意義ある部分なのである。この主張を補強すべく、彼は、更に世界を劇舞台に見立て、世界に属す個々人の生を、舞台に登場する登場人物と見なす。劇舞台には劣悪な人も登場する。この「劣悪な人」は、世界という作品全体の一部の色彩である。従つて、もし「劇から劣等な人が取り除かれてしまえば、それは美しい劇ではない。劇は、彼らのような人物によつても構成されているのだから」<sup>(5)</sup>となる。

このような考え方を、プロティノスは「惡徳は全体に対しても何らかの有益な貢献をする」<sup>(6)</sup>というようにまとめて表現しているが、プロティノスに特徴的なことは、ストア派以上に熱心に事例を重ね議論を展開させていく点であろう。それは絵画や劇のみならず歌唱をも主張に組み込んでいるところにみられる。すなわち、世界に属す各個人の生は「世界の原理と声を合わせよう」<sup>(7)</sup>唱つているのであり、「世界全体においても、それぞれのものが、あるべき場所に配置され、悪い音を発する者が暗黒やタルタロスに置かれるならば、ふさわしさと美しさがあるのである」<sup>(8)</sup>。おそらく「全体と部分」という主題においては、絵画や劇以上に「歌舞 (*Xορεία*)」が、その統一的な「世界の美」を主張するのに相応しかつたのではないかと思われる。少なくとも、ここにおいて「全体は美しい (*πάγκαλον*)」<sup>(9)</sup>という思想が、ストア派と協調的な形で成立しているのである。

以上は、ポルフュリオスが指摘したストア派の思想の「混入」を模索するものであるが、プロティノスとストア派との間の、思想上の相剋と和解を見るものもあつた。しかし、それは一端にすぎない。今回のシンポジウムでは、ストア派と新プラトン主義との関係について三者三様の捉え方が、従来の研究にはないほど意義ある仕方で報告された。近藤智彦氏（秋田大学）は、新プラトン主義をプロクロスとシンプリキオスに絞り、ストア派の *ἐπὶ ημῖν* の概念が、自由と運命の概念を通じて、新プラトン主義の系譜に流れ込む影響問題として、史的ペースペクティブを与える報告を行つた。山口義久氏（大阪府立大学）は、ストア派倫理学の中心概念である *ἀπαθετά* について、*πάθος* を「感情」概念と「受動」概念とに分けて考察するによつて、プロティノスの思想と概念的に共有する可能性を報告した。そして中川純男氏（慶應義塾大学）は、パトスの起源を身体において考えるというプラトン的図式が、ストア派を通じてプロティノスにまで行き渡る通奏低音的な解釈学的展開があることを明確にする報告を行つた。これらの諸氏の研究を基盤にしつゝ、新プラトン主義をめぐる今後の一層充実した比較研究の展開がおおいに期待されるところである。

## 【註】

- (1) Porphyros, *Vita Ploti*, 14; 'Εν δὲ τῷ γράφειν σύντομος γέγονε καὶ πολὺνος βραχύς τε καὶ νοήμασι πλεονάζων ἢ λέξει, τὰ πολλὰ ἐνθουσιῶν καὶ ἐκπαθῶς φράζων καὶ τὸ συμπαθείας ἢ παραδόσεως.' Εἰμὲ μικταὶ δὲ ἐν τοῖς συγγράμμασι καὶ τὰ Σπωτὰ λαθάνοντα δόγματα καὶ τὰ Περιπατητικὰ καταπεπνύκωνται δὲ καὶ ἡ "Μετὰ τὰ φυσικὰ" τοῦ Αριστοτέλους πραγματεία. 大阪府記述『プロトマイノス・ポルフュリオス・プロクロス』(中央公論社「世界の名著」続二、「一九七六年」) に引。<sup>①</sup>

- (2) *Enn.*, IV, 7, 6; εἰ σῶμα εἴη ἡ ψυχὴ, οὐτε τὸ αἰσθάνεσθαι οὐτε τὸ νοεῖν οὐτε τὸ ἐπίστασθαι οὐτε ἀρετὴ οὐτε τὸ τῷ καλῶν ἔσται.

- (3) われらん、絵画の事例はトポスのなつていたのかもしれない。しかし、プロティノスもストア派のものと知らずに自ら考えていたのかもしれない。しかしながら、ポルフュリオスは、それを「混入」と考へていた可能性が大きいのである。

- (4) *Enn.*, III, 2, 11; ὃ δὲ ἄρα τὰ προσήκοντα ἀπέδικεν ἔκάστῳ τόπῳ.

- (5) *ibid.*; τὸ δὲ οὐ καλῶν ἔστιν, εἴ τις τοὺς χείρους ἔξελοι, καὶ ἐκ τούτων συμπληρούμενοι.

- (6) *Enn.*, II, 2, 5; ἡ δὲ κακία εἰργάσατο τι χρήσμαν εἰς τὸ ὅλον.

- (7) *ibid.*, 17; ὃς συμφωνεῖν τῷ τοῦ παντὸς λόγῳ.

- (8) *ibid.* Καὶ γὰρ ἐν τῷ ὅλῳ τὸ πρέπον καὶ τὸ καλῶν, εἰ ἔκαστος οὐ δεῖ τετάξεται φθεγγόμενος κακὰ ἐν τῷ σκότῳ καὶ τῷ

$\tau\alpha\rho\alpha\rho$ . たゞ「歌唱」の比喩もあたストア派起源であるとの可能性も残ざれど。Cf. L. Edelstein & J.G. Kidd, *Posidonius*, Cambridge University Press, 1972, F18.

(9) 拙稿参照。「プロトイヘペスにおける pankalia の思想——『舞台としての世界』概念の原風景——」、上智大学文学部哲学科紀要第三回号、一〇〇八年三月。